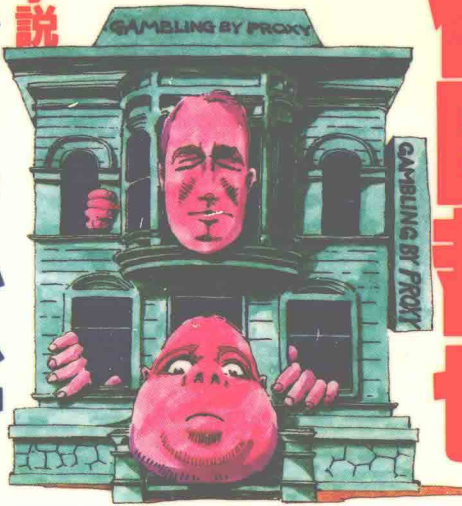


阿佐田哲也

新麻雀小説



ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

KODANSHA NOVELS

講談社
文庫
文庫

ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

田哲也

ODANSHA

講談社
ノベルス

NOVELS

ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

昭和六十二年十月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六四〇円

著者——阿佐田哲也 ©1986 TETSUYA ASADA Printed in Japan

発行者——野間惟道



発行所——株式会社講談社

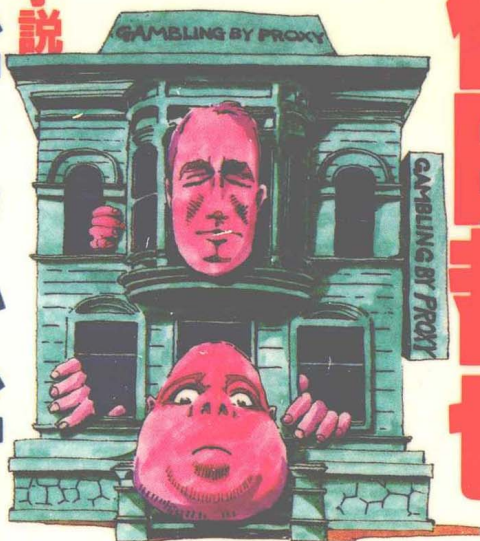
東京都文京区音羽二二二 郵便番号一一一 電話東京(〇三)——九四五——一一(大代表)

印刷所——株式会社廣済堂 製本所——株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

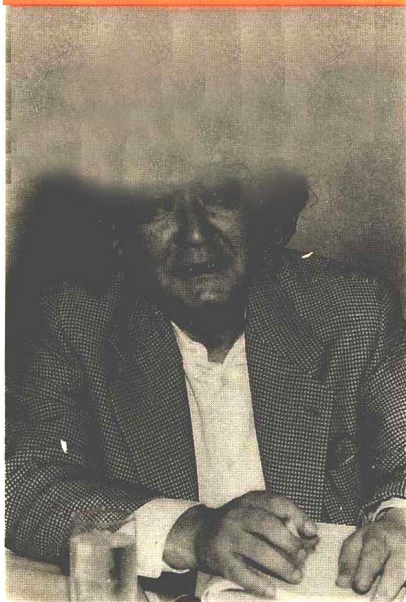
阿佐田哲也

新麻雀小説



ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

KODANSHAS
NOVELS
講談社
ノベルス



阿佐田哲也(あさだ・てつや)

昭和4年東京生まれ。本名の色川武大で直木賞(離婚)受賞。代表作に「麻雀放浪記」「ばいになぶる一す」「先天性極楽伝」

殺し殺され騙し討ち、ここは地獄の二丁目。ヤバ市ヤバ町、鬼が棲む。泣いてる奴はもつと泣け、泣かしたあいつもすぐに泣く。笑う雀鬼は俺一人——。雀プロ、医者、僧侶、女ソープ経営者、ドラ大学生、警官などが繰りひろげるギャンブル・デスマッチ。スリル満点のエンターテインメント、長編新麻雀小説！

SBN4-06-181269-6

0293 ¥640E (0)

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertong.com

ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

佐田哲也

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ヤバ市ヤバ町雀鬼伝

昭和六十二年十月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六四〇円

著者——阿佐田哲也 ©1986 TETSUYA ASADA Printed in Japan

発行者——野間惟道



発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二二 郵便番号一一一 電話東京(〇三)——九四五——一一(大代表)

印刷所——株式会社廣済堂 製本所——株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

目次

第一局	代打ち稼業	7
第二局	三〇〇分一本勝負	33
第三局	都にカモの降る如く	59
第四局	ふうてんパイオニア	85
第五局	おしまいツネ公	110
第六局	さがつちや怖いよ	136
第七局	不幸の神さま	162
第八局	恍惚のギャンブラー	189

第一局 代打ち稼業だいう かぎよう

一

朝十時半、こんな時間に起きている奴は堅気かたぎだけだろうが、場外馬券売り場でオレンプとぶつかつた。オレンプは大分前に、殺人で刑務所にぶちこまれていたはずだが、ほとんど老けても居らず、長身に外国製の春のコートを恰好よく羽織つて、あいかわらずおっとりした物腰だった。凄いな、とフウ公などは尊敬してしまう。器量のある野郎はどう転んでも目があるんだからな。

「やあ、オレンプ——」

とフウ公は愛想笑いを浮かべていった。

「よッ、色男——！」

たちどころに奴は笑顔で素晴らしい返した。

「どうですね。いいところ、ありますか。一手、ご教授してくださいよ」

「冗談じゃねえ。お前さんにクーパーなんか教えられないよ」

クーパーというのは空八百長のこと。いい加減な偽情報を流してスポンサーに銭を使わせる。車券は呑じまうから、来なければ旦那の車券代はそっくり懐ろに入る。たまに偶然でも当ると御祝儀になるというやつだ。フウ公はそれで辛うじて世間を渡っていた。

「ハハハ、そうでもないでしょう。何かいいことがあります。ああ、そう願してるよ。ここ一番という狙いねらいはどこ？」

むろん、社交辞令にきまつてる。フウ公は話題をそらすように手近かの喫茶店を指さした。

「寒くて道端みちばたに立ってるのもおっくうだよ。モー二

ングでもやろう。俺、おごる」

実際、おごるだけの値打ちはあるように思えた。オレンプは、前科四犯、だか五犯のはずで、いずれも一季通し、つまり春夏秋冬を刑務所ですごしまくってきた奴だ。向かい合っていると、フウ公は自分も大物になった気分になってくる。

「ところで、十年ぶりかな」

「そうだね。そうなるかもしれない」

「ちつとも変らんね。オレンプは」

「そうじゃないよ。もう若い衆が活躍してて、俺なんかの時代じゃない。隠居ですよ」

「隠居ができりゃア、いいご身分だ」

「隠居しか引く目がないのよ。下手に一人歩きすりゃアすぐコロされちまう」

フウ公が厄年の四十二。オレンプはたしか五ツ年上だから、もう少しで五十に手が届くはずだ。遊び人の五十歳は、普通の市民の七十歳くらいに当るだろうか。

「それで、あれかい、フウちゃんは、まだお仕事、

続けてるんでしょ」

「クーパツ屋かい。まアなんとかね」

「いい旦べエをつかまえてるんだらう。うらやましいね」

「見りゃわかるだらう。御用を喰わないだけめつけもので、相場通りの不景気さ。昔なア、焼跡ヤミ市の頃のボロい稼ぎが、夢みてえだなア。お互いさまによ、といいてえが、あんたはあいかわらず、暖かそうだねえ。なにかい、おいしいコレでも搦まえてるか」

「もう、銭を出さなきゃ女が寄ってこないよ。淋しいがそういう年頃ですよ」

「あんたの男前でもかい」

「そうだ、それで思い出したんだけど、フウちゃん、あんた顔が広いから、誰か、いい打ち手を知りませんか」

「——打ち手って、あんた以上の？」

「あたしは駄目。気力も、反射神経も、もう駄目さ。ばくちは四十までですよ。それすぎたら、隠居

しなくちゃ。隠居して、別の役をやるのさ。女郎が遣り手婆てばアになるようにね」

「なるほど、遣り手婆アか」

「それが安全。安全運転が第一さ」

フウ公はちよつとがっかりした。

「オレンプがねえ。遣り手婆アねえ」

「早速だけど、居るかい、打ち手。若くたって、銭無しだっけかまいませんよ。銭はこつちがつけます。ただね、昔のあたしより弱くちゃ困る」

「種目は何」

「麻雀」

「仕事かい」

「自動卓だからね。それに、寒いことはしたくないから。平打ちで結構」

「つまり、代走選手だね」

「ひと晩、一千万はあげられますよ」

「——居ないこともないが、なんだいそりゃア、どんな麻雀？」

「きわめて普通のさ。東風戦トシフウだけだね。どこでもや

ってる麻雀」

オレンプはそういって、ニツと笑った。男前のせいもあって彼の笑顔はとても魅力的だ。なんだかうさん臭くさなような話だが、オレンプとなら、相棒になってもいい。

「その、一千万だがね——」とフウ公はいった。

「まさか、空発クハツじゃあるまいね」

「話によつては、五百万は前金で渡してもいいですよ。もっとくわしく話さなけりゃ信用しないかもね。ま、簡単にいえば、うちの社長がね、大きい麻雀でカモられてるのよ。それで誰かに代打ちさせて、損害を少しでも回収しようということですよ。お前が代走しろっていわれたんだけどね、そりゃあたしだって使われている身だから、なんかのお役に立ちたいけれど、隠居の身だからねえ」

「わかった。心当りに当ってみよう」

「そう願えますか。へへへ、なんとか、フウちゃん、ここ一番助けてください」

オレンプが掌てを合わせて拝んだので、よせやい、

とフウ公はその掌を叩き、新米の遣り手婆アよろしく店の外に飛び出していった。

二

押樗鉄雄、というおそろしく固い名前の名刺をくれたので、フウ公ははじめてオレンプの姓名を知った。もっともこれが本名かどうか、保証は一つもない。肩書のところには、ただ、支配人、と記してある。よく透かしてみると、Windsor と薄桃色の透し字が入っている。多分、ソーブランドの店名だろうか。

電話を入れると、はたしてそれらしき空気が伝わってきた。

「ああ、どうも。早速ご配慮を願ったそうで、感激ですね。それじゃ、委細面談といきますか、ねえ、善は急げで、これからというのはどうでしょう」

オレンプはいつも愛想がいい。

フウ公は受話器をおいて、打合せた喫茶店にその

男を連れていった。

「ねえ、背中が丸まってるよ。少し強そうに見せてくださいな。なにしろ面接なんだからね。あんたももう若くねえんだから、自分を売る工夫をしないと駄目だぜ」

フウ公が連れてきたのは、本気かシャレか、麻雀業者という看板をあげている変り者。日本広しといえどもこの看板をあげているのは自分一人だ、というだけで、どこで何をしているのかさっぱりわからない。

「ねえ、オレンプ、この人なんだがね。俺も焼鳥屋で会うだけなんで、よくは知らないんだけど、どうでしょうねえ」

オレンプは、魅力的な微笑を消さなかった。

「ああ、そうですか。結構ですよ。お願いいたしますしょう」

「――面接をするってことだったが、いいのかな」

「あの、昔――」とオレンプがいった。「カミ旦のところの賭場で、打ち合いましたっけね」

「そんなこともありましたかね。あの頃はあたしも若かったから。馬鹿をやりましたよ」

「お互いさまにね。まだ現役とはうらやましい」

「なアに、引退したいんですがね。いつまでも未練を残してみつともないです。もうこうなると賭場でくたばるのを待つだけでしょう」

「早速、場の手配をしますが、日取りはいつでもよろしいですか」

「お引受けした以上、いつでも」

「それじゃ——」とフウ公がすかさず声を入れた。

「前金で半分というのを——」

オレンプは笑みをたたえた唇を、それ以上に曲げて頷き、懷中から封筒をとり出した。

「それじゃ、これは一応、フウちゃんにお渡ししときますが、よろしいですか」

フウ公は、讃嘆の思いで、くろぐろと恰好いいオレンプの髪のアたりを仰ぎ見た。周旋料をこの中から勝手にとれという意味だろう。やっぱり此奴は、器量があるわい。

「それじゃア、フウちゃん、ありがとう。あとちょっと打ち合せがあるんでね」

オレンプがそういつて、フウ公をその店から押し出してしまう。

残った二人、それからしばらく黙って煙草をくゆらしていた。

「大丈夫かな——」と業者。

「フウ公？ 大丈夫でしょう。使っちゃったら使ったでいい。あのくらしいの金」

「いや、俺がさ。役に立つかな」

「その看板が続いてきたんだから」

「ほとんどは素人衆の麻雀だからね」

「しかし、驚ろきましたよ。あんたが現われるとはね」

「こっちもさ。あんたが雇い主とは」

「あたしは雇い主じゃない。単なるプロデューサーですよ」

「なぜ、打ち手をやめたの」

「その方が、安全だから」

「そうかねえ。あんたは面白い打ち手だった。誰とやっても面白い勝負をしたね。ホンビキでいえば、ヤマポン張りの名手だな。一発逆転の手を絶えずやってくるんだ。もっとも、面白い勝負つてのは、最高の技術がともなつてないとできないがね」

「あの頃はね。あたしもいろんなことをやってきたが、結局、博打ばくちが生き甲斐がだったんですね。今は駄目だ」

「老いたのかね。そんなふうにも見えないけど」

「それもありますがね。博打も変りましたよ。この前、八年、喰らいこんでるうちに、何もかも大変りだ。今、うちの社長がやってる麻雀、いくらのレストランだと思いますか」

オレンプはちょっと顔をひきしめた。しかし笑いの気配が顔のどこかに残っていて、それがかえって酷薄な表情に見えた。

「千点百万円。三万点通してハコ三千万円。場ウマが五の一五だから、二着で五千万、トップが一億五千万。別に差しウマをやらなくても、せいぜい二十

分くらいきさかの東風戦にそれだけの金が動くんですよ。気狂い沙汰ざたですね。そういつたつて堅気の人なら誰も本気にしないでしよう」

「どんな奴がそんなレートで打てるんだろう」

「金貸しか、いわゆるピンクゾーンの経営者たち。収入をきちんと申告しないから、銀行預金にもできないし、現金のまましこたま握ってる連中ですよ。とてもあたし等、そんな博打につきあえませんや。以前はね、博打は博打うちがやるもんだったけど、今はちがうんです。銭のある豚ぶたがやるものなんだ」

「すると、その豚どもと打つわけかな」

「待つてください。豚は自分じゃ打ちやしませんよ。選手を雇つて、酒を呑みながら見てるんですよ。銭のやりとりだけ、自分たちでやってね」

「なるほど——」

「我々はただのサイコロですよ。いやだねえ。ま、そのいやな役をあんたにさせるんですがね」

「それで——」と自称麻雀業者はいった。「これまでは、あんたのボスは、自分で打つてたの」

「いや——」

「誰かが代打ちしてたわけだね。そいつはどうした」

「どうも、結果がまずくてねえ。選手交代ですよ」

車が停まる音がして、大柄な、派手な化粧の三十女がつかつかと店の中に入ってきた。オレンプはスラツと立ちあがって、騎士のように恭しく彼女を坐らせた。

「うちの社長です——」

オレンプはそれから、麻雀業者のことを昔の知人だといって紹介した。

「大丈夫——？ 貴方」

オレンプが、男同士の眼差しで、チラツと合図をよこした。

「今まで、どのくらいのレートで打ったことがあるの」

「ギア、まちまちだね。レートは特に関係ない。あたしの場合ね。打つのが好きなんだから、賭けなくたってやるよ」

「そうもいかないのよ。あたしたちのレートだとね。大概はびびるのよ。レートをきいてね。そこらへん、しつかり覚悟してもらわないと」

「いくらだろうと、あんたの銭だろう。俺の銭が動くわけじゃないから」

「そりゃそうだけどねえ。いぎやってみるとお金の力は大きいわよ」

「気にしてたら代走なんかできないよ。気にいらなきゃ雇わなければいい」

麻雀業者はそこではじめて笑顔を見せた。

三

東風戦（東風だけの戦い）。
但し、ワレ目あり。

ワレ目というのは近頃流行のルールで、サイの目が出た牌山の主が、他家の倍の計算になる。和了すれば倍の収入、ツモられても放銃しても倍払う。ツキの要素が濃くなるともいえるが、ともすれば小競

り合いになりがちな東風戦が、波乱の色が強くなつて面白い。

メンバーが揃つてみると、意外なことに、いずれも老けこんでいて、麻雀業者がもつとも年下かと思えるほどだった。隠居と称するオレンプが、口先とは逆にひどく若々しく見える。

颯爽としたオレンプに比して、選手たちは年齢以上に疲弊していた。一番年長らしい玉ちゃんという選手は、戦後、パチンコ王といわれたほどの成金の時期もあったらしいが、今はただの貧相な老人だった。彼は派手なスキージャケットを着こんでいて、自分は指導員だと自慢したが、これ以上ちぐはぐな恰好が考えられないほどだった。

カマ秀という選手は痩せこけた初老で、眼だけが光っており、いかにも金のやりとりしか考えていないようなタイプだった。しかしときおり、いやな咳をしている。もう一人のノロちゃんという選手は、脂ぎった大男だったが、歯が一本もなかった。

四人が揃うと、医者と看護婦が来て、採血したり心電図をはかったりした。それから静脈に、注射を一本打った。オレンプが、甲斐甲斐しく業者の左腕をもんでくれる。

「やらでものことなんですがね、がまんしてください」

「ヒロポンを打つてことは、契約の中に入ってたかな」

「こんなことまで契約しなきゃいけないですか」

「やつぱり、煙草とは少しちがうからね」

「馬主たちの注文なんです。それに、一人だけひそかに打ってきたりすることを避けられますからね」

「ときどき、ちがう薬を打つんじゃないのかな」

「なぜ——？」

「八百長のために」

「それはない。誓って」

「返事が生き生きしてたね。昔もあんたはそうだったな。とてもいい顔でシャミセンをひくんだ」